

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです」。これが十字架の死後、三日目によみがえられた主イエスが、天に昇られる前、弟子たちに命じて言われたことです。そして、弟子たちをして、彼らが聖霊のバプテスマを受ける理由、それは主の力を受けて、地の果てまで主を証する者となることでした。

今日の箇所は、その続きですが、そのように主に命じられた弟子たちは、その後どうしたのか、ということが記されています。彼らはどうしましたか？12 節「そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあつて、安息日の道のりほどの距離であつた」。この安息日の道のりほどの距離とは、約 900 メートルですが、弟子たちは、主に言われた通り、エルサレムに帰りました。

では、そこで何をしていたのでしょうか？「エルサレムを離れないで、私から聞いた父の約束としての聖霊のバプテスマを受けることを待ちなさい」と主は言われたわけですが、彼らはそこでどのようにして主の約束を待っていましたか？13 節前半「彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上つた」。そして、14 節「みな心を合わせ、祈りに専念していた」。彼らがしていたこと、それは心を合わせ、祈りに専念することでした。

主がお命じになったことの中に「祈りなさい」という言葉は見当たりません。でも、彼らは知っていたのです。「待つ」ということは、そこに「祈り」が伴うことを。それは、それまでの主との歩みから彼らが学んだことだと思います。そして、彼らの祈りは、みな心を合わせるというものでした。約束のものを待つ、という同じ心で祈りに専念していたとすることができます。

一つ興味深いのは、そこに集まっていた人々の中に、主の兄弟たちもいたということです。13 節の続きを見ます。「この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであつた。14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた」。

ここには「イエスの兄弟たち」としか書かれていません。でも、そこにヤコブ書の著者ヤコブとユダ書の著者ユダもいたと思われまふ。彼らは、初めから自分の兄弟（イエス）が、約束のメシヤだと信じていましたか？いいえ。おそらく、それは主の十字架と復活の出来事の後、復活された主が彼らにご自身を現されることによってだと思ひます。確かなところはわかりませんが…。いずれにしても、主の家族である兄弟たちが、弟子たちと共にそこにいたということは、彼らもまた主を信じる者であつた、そして、それは主が聖霊を通して、彼らの心の目を開かれた結果と言ひるでしよう。

聖書は、そのところに主を裏切つたイスカリオテ・ユダを除く 11 弟子と、その他の弟子たちが 120 名ほど集まっていたと伝えています。そして、彼らはみな心を合わせて祈っていました。それが主から「聖霊を待つように」と命じられた彼らのしていたことです。皆さんは、どう思ひられますか？彼らが「心を合わせ、祈りに専念していた」という時、その祈りはどのようなものだったでしよう？彼らはみなそれぞれ個人で祈っていたと思ひますか？彼らの祈りとは、この後、ペテロが代表して語つた後に祈りが続くように、誰かが代表して祈つた祈りに、みな心を合わせるものであつたのではないでしようか。

今の時代は、横の関係が希薄なゆえに、個人の祈りを重要視する傾向があるかも知れまふ。もちろん、それも大切でしよう。でも、信仰者同士が共に祈ることも大切にしないといひまふ。なぜなら、主がこう約束されたからでしよう。マタ 18:19-20「まことに、あなたがたにもう一度、告げまふ。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。20 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にあるからでしよう」。みな心を合わせ、祈りに専念することを通して、弟子たちは聖霊のバプテスマを受けることを待っていました。

では、祈りに専念することが、彼らのしていたすべてでしようか？16 節以降で、ペテロが、主を裏切り、その後、自ら死を選んだユダについて語っています。主イエスが語られ、聖書に記されていることばの中に、主

の昇天後、ユダの代わりに誰かを使徒として立てるようにと直接的に語られている箇所はありません。もし、そうであるなら、なぜペテロはそのことを考えたのでしょうか？祈りの中で主が示されたからですか？それとも、思いつきでそう言ったのでしょうか？

私の考えは、祈りの中で主がそのことを示されたと思います。でもそれは、ペテロたちがみことば（この場合には旧約聖書）を通して主の導きを求める中で、主がみことばをもって示されたということができると思います。というのも、16-17 節「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。17 ユダは私たちの仲間として数えられており、この務めを受けていました」とペテロは語っています。

彼は言います。「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかった。ユダは、この務めを受けていたのだ」と。つまり、ペテロは、ユダの裏切りと主の十字架の意味をみことばから求める中で、このような理解へと導かれました。彼のいうダビデの口を通して預言された聖書のことばとは、詩篇 41:9「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた」。

でも、考えて見て下さい。もしユダがこの務めを受けていたのなら、ユダとその他の弟子たちのどこに違いがあったのでしょうか？というのも、ユダは自ら率先して主を裏切ったわけですが、ペテロもまた主を裏切りました。主はユダが裏切る前に、最後の晩餐の席でご自分がそのことを知っていることを彼に直接伝えておられます。それを聞いた上で、ユダはユダヤの指導者たちのところへ行ったわけですが、ペテロに対しても主は「あなたはわたしを知らないと言う」と預言され、ペテロは主を三度否みました。

このユダとペテロとの違いは何ですか？自分から進んで裏切ったのと、追い込まれた状況の中で受け身的に裏切ったとの違いでしょうか？もしそうなら、なぜ主はそもそもユダを 12 使徒として選ばれたのでしょうか？主が人類を救うため、その身代わりの死を遂げるためのきっかけをつくったユダは、その務めを受けていたわけですが、いったいユダのどこに他の弟子たちとは違う点があったのでしょうか？それは裏切りという失敗の後にそのヒントがあるように思います。

「この務めを受けていました」というペテロのことばの続きを見ます。18 節「（ところがこの男は、不正なことをして得た報酬で地所を手に入れたが、まっさかさまに落ち、からだは真つ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった）。ユダは誰かに殺されたのでしょうか？福音書にこの出来事が記されています。

マタ 27:3-5「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、4 『私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして』と言った。しかし、彼らは、『私たちの知ったことか。自分で始末することだ』と言った。5 それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった」。

主を裏切った後、ユダは後悔しました。主イエスが罪に定められたのを知って、彼は「自分は罪を犯した」と自分の罪をユダヤの指導者たちの前で認めたのです。そして、銀貨も返しそうとしました。でも、もう手遅れであることを知った彼は、外に出て、自ら首をつった、つまり、自ら死を選んだのです。私はここに主が彼について言われたことばの意味を見るような気がします。マタ 26:24「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです」。

なぜ主は、ご自分を裏切るユダはのわれる、そのような人は生まれなかったほうがよかった、と言われたのでしょうか？それは主がユダのその後を、つまり、彼が選ぶ道を知っておられたからではないでしょうか？主はすべてご存知のお方です。ですから、主はユダが裏切ることを本人にも伝えておられたのです。にも関わらず、ユダは自分の心に決めた道を選びました。そして、その後も自ら滅びを選んだのです。

ペテロが「何度まで人を赦すべきですか？7 度までですか？」と主に尋ねた時、主は「7 度を 70 倍まで」とおっしゃいました。おそらくユダもこの主のことばを聞いていたことでしょう。でも、彼は最後までそのあわれ

み深い主に立ち返ることをしなかった。もっと言うと、自分自身から目を離して、主なるイエスを仰ぎ見ることしなかったのです。それゆえに、自分の罪を認めながらも、主のあわれみを請うのではなく、自らのちを断ってしまいました。ペテロは、そのことを聖書からこう理解しています。

20-22 節「実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』（詩篇 69:25) また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』（詩篇 109:8) 21 ですから、主イエスが私たちと一しょに生活された間、22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません」。そのようにして祈りとくじによってマッテヤが選ばれたのです。

ユダのことに關しては、多くの人々が疑問をもたれることでしょう。でも、どうか「ユダはどうなったのか？」「なぜ主はユダを選ばれたのか？」と、私たちがここで考えても答えが出ないようなことに関して議論するのは避けて下さい。確かなことは、主は罪人の私たちを救うために、ご自分のいのちを捨てて下さった、十字架にかかって死んで下さったということです。主は私たちを罪に定めるため、さばきをもって来られたのではなく、むしろ、その神のさばきを代わりに受けて私たちを救うために来て下さいました。

ですから、もしあなたのうちに主に喜ばれない思いや罪の歩みがあることを示されるなら、いつでも悔い改めて、主に立ち返って下さい。主は自分で自分を正しいとする者ではなく、またその行いによって自分を誇る者でもなく、むしろ、心砕かれた人、「神様しか望みがもてません」といって、ご自分の前にへりくだる者をあわれみ、その血潮をもって救って下さいます。それはご自分と一しょに十字架につけられた、あの強盗のひとり主があわれんで、彼にパラダイスを約束されたと同じようにです。

主から「エルサレムを離れないで、聖霊のバプテスマを受けることを待ちなさい」と命じられた弟子たちは、祈りとみことばをもって待っていました。そのように私たちも日々聖霊に満たされるため、まず待つところから、つまり、祈りとみことばをもって主を待ち望むところから信仰の歩みを始めさせていただこうではありませんか。そのようにして聖霊によって主の力を受けるなら、聖霊が私たちに主イエスをわからせて下さいます。そして、いつでも、どのような時にも、主を証する者とならせて下さるのです。